

『山月記』の五つの謎

— 撞着語法と対照法の罫 —

一 はじめに

「山月記」は不可解な作品である。これを素朴に受け止めようとすれば、たとえば高校の教室で語られるように、「強烈な自意識と自尊心に押し潰されて、人間らしい心を失い、ついには虎に変身してしまつた男の悲劇。」と読めるように思われる。が、「山月記」には、そのような素朴な読みでは説明しきれない、いくつもの不可解な点がある。本稿では、「山月記」について五つの謎を提示する。そのうちの三つは、「山月記」のハイライトである、李徴の告白をめぐつての謎。四つ目は、李徴の詩に対する袁慘の思わせぶりな感想、そして最後は、作品の基本設定における謎である。本稿は、修辭学の知見から李徴の告白を読み解くことで、これら五つの謎全てに答えていく。

李徴の告白を読み解くためには、修辭学の知識が不可欠である。

柳 沢 浩 哉

彼の告白は、深遠かつ思わせぶりなものであるが、彼は自らの告白をそのように演出するため、告白の中で可能な限りの修辭技法を駆使している。そして、過大な表現効果を期待するあまり、彼の自己分析は歪められ、修辭学のタブーが犯されている。李徴の告白に残されているのは、修辭的演出への異様ともいえる執念の跡である。そして、この修辭的演出の中核をなしているのが、告白中の最も印象的な表現「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心」であり、この表現の中にわれわれは二つの謎を見出すことができる。本稿は、「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心」をめぐる謎を糸口として、李徴の告白に見られる謎、さらに袁慘の言葉の謎を解き進めていく。そして、それらの謎解きから次第に明らかになる、李徴の自尊心の計り知れない巨大さは、「山月記」の読み、さらに「山月記」の主題論に再考を迫るであろう。本稿はまず、次の引用から始めたい。

私が「山月記」の教材研究や作品研究の多くを読んで感じる不満は、それらの執筆者があまりに告白という形式にナイーブであると思われることである。特にこの場合、告白するのは、李徴という、自意識と自尊心の化け物のような男なのだ。その言葉をそのまま信じる方がどうかしているだろう。

右の引用には、李徴の告白に向うべき姿勢が端的に表現されている。さすがに、最近の「山月記」研究は、李徴の告白をそのまま聞き入れるほどナイーブではなくなっているが、告白に隠された数々の「ほころび」に注目した研究は、いまだ見当たらない。しかし、「李徴という、自意識と自尊心の化け物のような男」は、告白の中で必ず粉飾を行い、自己の正当化・美化を図るはずである。そして、粉飾には「ほころび」が出る。この「ほころび」こそ、李徴の本心・隠された性格を探る最も有効な手がかりとなるだろう。本稿は、告白に徹底した疑いの目を向けることで、隠された「ほころび」を見つけ出し、それらに修辞学の光を当てて、「ほころび」の生じた原因・背景を明らかにしていく。この作業を進める中で、隠された李徴の本性があぶり出されていくであろう。

本稿は、李徴の告白を対象に分析を進めるので、告白の全文をまづ引用しておきたい。(傍線・波線は筆者。)

何故こんな運命になったか判らぬと、先刻は言ったが、しかし、考えように依れば、思い当ることが全然ないでもない。人間であった時、己は努めて人との交わりを避けた。人々は己を倨傲だ、尊大だといった。実は、それが殆ど羞恥心に近いものであることを、人々は知らなかった。勿論、嘗ての郷党の鬼才といわれた自分に、自尊心がなかったとは云わない。しかし、それは臆病な自尊心とでも言うべきものであった。己は詩によって名を成そうと思いが、進んで師に就いたり、求めて詩友と交わって切磋琢磨に勉めたりすることをしなかった。かといって、又、己は俗物の間に伍することも潔しとしなかった。ともに、我が臆病な自尊心と、尊大な羞恥心との所為である。己の珠に非ざることを惧れるが故に、敢えて刻苦して磨こうともせず、又、己の珠なるべきを半ば信ずるが故に、碌々として瓦に伍することも出来なかった。己は次第に世と離れ、人と遠ざかり、憤悶と慙恚とによって益々己の内なる臆病な自尊心を飼い太らせる結果になった。人間は誰でも猛獣使であり、その猛獣に当たるのが、各人の性情だという。己の場合、この尊大な羞恥心が猛獣だった。虎だったのだ。これが己を損い、妻子を苦しめ、友人を傷つけ、果ては、己の外形をかくの如く、内心にふさわしいものに変えて了ったのだ。今思えば、全く、己は、己の持っていた僅かばかりの才能を空費して了った訳だ。人生は何事をも為さぬには余りに長いが、何事かを為すには余りに短いなどと口先ばかりの警

句を弄しながら、事實は、才能の不足を暴露するかも知れないとの卑怯な危惧と、刻苦を厭う怠惰とが己の凡てだったのだ。己よりも遙かに乏しい才能でありながら、それを専一に磨いたがために、堂々たる詩家となった者が幾らでもいるのだ。虎と成り果てた今、己は漸くそれに気が付いた。それを思うと、己は今も胸を灼かれる悔を感じる。己には最早人間としての生活は出来ない。たとえ、今、己が頭の中で、どんな優れた詩を作ったにしろと、どういふ手段で発表できよう。まして、己の頭は日毎に虎に近づいて行く。どうすればいいのだ。己の空費された過去は？ 己は堪えらなくなる。そういう時、己は、向こうの山の巖に上り、空谷に向かつて吼える。この胸を灼く悲しみを誰かに訴えたいのだ。己は昨夕も、彼処で月に向かつて吼えた。誰かにこの苦しみが分かつて貰えないかと。しかし、獣どもは己の声を聞いて、唯、懼れ、ひれ伏すばかり。山も樹も月も露も、一匹の虎が怒り狂って、哮っているとしか考えない。天に躍り地に伏して嘆いても、誰一人己の気持ちをつ分かつてくれる者はない。ちようど、人間だったころ、己の傷つき易い内心を誰も理解してくれなかったように。己の毛皮の濡れたのは、夜露のためばかりではない。

二 「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心」をめぐる二つの謎

本章では「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心」をめぐって二つの謎

を提示する。まず最初の謎は、「虎」と「羞恥心」とのイメージのずれである。李徴は「ともに、我が臆病な自尊心と、尊大な羞恥心の所為である。」と述べて、自分の欠点を「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心」という形に集約した上で、この二つの欠点の変身の原因であつたと強調している。しかし、虎に変身させた原因がこの二つに集約されるとすると、どうしても腑に落ちない点がある。それは、「虎」と「羞恥心」とのイメージのずれである。ここでは、「自尊心」と「羞恥心」の二つの心が挙げられている。そのうちの「自尊心」は、自信、尊大、傲慢、孤高といった性質と連続しており、「虎」との間に明らかにイメージの重なりを見出せる。しかし、その一方で「羞恥心」に「虎」と連続するイメージはない。それどころか、「羞恥心」は虎によって連想されるものからは、最も遠いところ、位置する心である。「羞恥心」から連想される動物をあえて挙げるとするならば、虎とは対照的な臆病で小型のもの、たとえばネズミ・リス・ウサギといった小動物にならう。もちろん、李徴は「羞恥心」を単なる羞恥心ではなく「尊大な羞恥心」という形で登場させている。「尊大な」は「自尊心」と意味的に近い位置にあるから、「羞恥心」に「尊大な」を修飾させることによつて、「羞恥心」は大きく「尊大」の位置、さらに虎の位置に近づくことになるが、それでも、やはり疑問は消えない。どのようなレトリックを使おうと、虎に変身した原因として「羞恥心」を挙げれば、この部分

で語りは混濁し、告白全体が伝わりにくいものとなってしまうからである。「尊大な羞恥心」というレトリックを使ってまで、李徴はなぜ「羞恥心」にこだわったのだろうか。これが第一の謎である。⁽³⁾

次は第二の謎である。「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心」をめぐっては、より大きく、そしてより重要な謎がある。それは、この表現が実体以上に思わせぶりである、ということである。李徴の告白を批判的に読み解いた研究の嚆矢として評価される「山月記」論——自己劇化としての語り——⁽⁴⁾の中で、蓼沼正美氏は、この表現をめぐって次のように書いている。

確かに「臆病な自尊心」と「尊大な羞恥心」という言述は、へ臆病な自尊心へ尊大な羞恥心」という以上の何かを聞き手に感じさせる。それだけに私たちは、「山月記」の重要語句とし、「自意識」に苦悩する（近代人）を、言い換えれば（近代文学）として書かれた（中島敦）の「山月記」を読んで来たのである。しかし、「臆病な自尊心」といい、「尊大な羞恥心」といい、李徴の自己分析を読む限りその内実も、またそう表現しなければならぬ必然性も全く伝わっては来ないのである。要するに李徴は、（臆病な自尊心）と（尊大な羞恥心）という概念を詩的に組み換えただけであり、それ自体単なる修辞に過ぎないのである。そうしたことは、この場面で語られた様々な比喩や対句、そして

漢語についても言える。

この見解は非常に鋭いものであり、本稿は、この見解を具體化して詰めていったものということも可能である。ただし、修辞学の知見からこの見解を詰めていくと、蓼沼氏の立っていた地点からは見通すことのできなかつた地平を見出すことができる。本稿は、蓼沼氏と基本的に同じ立場に立ちながらも、最終的な見解は大きく異なり、「そう表現しなければならぬ必然性」が存在すること、そして、その「必然性」の実態とは何であったか、あわせて「へ臆病な自尊心へ尊大な羞恥心」という以上の何かの正体を、修辞学の知見から探り出していく。本稿の予告はこのくらいにして、蓼沼氏の指摘に戻ろう。ここでは、この表現が「へ臆病な自尊心へ尊大な羞恥心」という以上の何かを聞き手に感じさせる」という指摘に賛同し、この事実を重視しておきたい。そして、この表現の感じさせる含著が、告白全体に深遠な雰囲気を与え、読者に多様な読みの誘惑を与え続けていることも疑う余地はあるまい。それでは、「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心」が感じさせる「内実以上の何か」とは、一体何であろうか。これが第二の謎である。

三 「尊大な羞恥心」の正体と、第三の謎

告白の中で李徴は、自分が「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心」に集

約される二つの心に支配されていたことを強調する。このように語られる彼の心は、二面性のある複雑なもののように見えるが、「自意識と自尊心の化け物」のような李徴の言葉を顔面どおりに受け取るのは少なからず危険であろう。われわれは、彼の実際の心がどのようなものであったのかを、告白から慎重に検証していく必要がある。

まず、告白において自尊心はどのように現れているのだろうか。自分の才能への李徴の強烈な自負は、告白の随所にもじみ出ており、自尊心についてはその存在を容易に確認することができる。そのいくつかを抜き出してみよう。「昔ての郷党の鬼才といわれた自分」。「己よりも遥かに乏しい才能でありながら、それを専一に磨いたがために、堂々たる詩家となった者が幾らでもいるのだ。」「今、己が頭の中で、どんな優れた詩を作ったにしろと、どういふ手段で発表できよう。」李徴には過去に対するプライド、そして何より、自分には誰よりも才能があるはずだという強烈な自負がある。その思いは、「堂々たる詩家となった者」すら、才能の面では「己よりも遥かに乏しい」と、当然のように言い切る個所に端的に現れている。その上で彼は、現在でも詩作への自信を失ってはいない。一見謙虚な反省の言葉とは裏腹に、李徴は己の才能に対して現在でも強烈な自負を持ち続けているのである。これは、強烈な自尊心と言ひ換えていいであろう。もちろん、李徴の自尊心は微動だにしない、圧倒的な強さを持つものではなく、強さの反面、脆弱さを

隠しもったものである。この脆弱さを検討する前に、彼の羞恥心について考えてみよう。

実は、ここに李徴の告白を読み解く鍵がある。李徴はたとえば、「我が臆病な自尊心と、尊大な羞恥心との所為である。」のように語り、己に強い羞恥心のあったことを強調している。しかし、不思議なことに告白からは、李徴の中に「尊大な羞恥心」はおろか、ごく普通の羞恥心が存在したことすら、ほとんど確認できないのである。この点を意外であると感じられる読者もおられると思うので、少々丹念に確認していきたい。告白に語られた李徴の行動の中で、羞恥心の可能性を感じさせる部分は二箇所だけである。その両方を順に検討していこう。

その一つは、「進んで師に就いたり、求めて詩友と交わって切磋琢磨に勉めたりすることをしなかつた。」の箇所である。なぜ、李徴は、師に就かず、詩友との切磋琢磨を避けたのであろうか。彼はその心理を次のように語っている。「己の珠に非ざることを惧れるが故に、敢えて刻苦して磨こうとせず、又、己の珠なるべきを半ば信ずるが故に、碌々として瓦に伍することも出来なかつた。」注目したいのは、この前半部である。優れた師に就けば、あるいは、詩友と交わり切磋琢磨すれば、李徴の詩人としての才能がどの程度のものか、すぐに明らかになるであろう。その時、自分の「珠に非ざること」が暴露されはしないか、李徴はそれを「惧れ」たため

に、師に就くことも、詩友と切磋琢磨することもできなかったのである。この「惧れ」は、その後、もう一度繰り返される。「事実は、才能の不足を暴露するかも知れないとの卑怯な危惧と、刻苦を厭う怠惰とが己の凡てだったのだ。」彼が刻苦を嫌ったのは、自分には誰よりも才能があるはずだという自負のためであろう。しかし、その一方で、李徴は「才能の不足を暴露するかも知れない」という「危惧」をもつていた。李徴は、自分には誰よりも才能があるはずだという強烈な自負をもちながら、その才能が本物でないことを密かに怖れていた。彼が、師に就かなかつたのも、切磋琢磨できなかったのも、彼らの前に出るのが恥かしかつたからではない。自分以上にも才能のある人間はいないと自負していた李徴が、恥かしくて彼らの前に出られなかつたと考えるのは、あまりに不自然である。彼らと交わることで「才能の不足」が暴露されること、李徴はそれをひたすら「惧れ」「危惧」していたのである。強烈な自負を持ちながらも、己の才能に確信がもてない、この危うい自尊心こそ「臆病な自尊心」の正体なのである。

ただし、ここで次のような反論があるかもしれない。李徴は、確かに「才能の不足」の露見を恐れていたが、「才能の不足」を周囲に知られることは何より恥かしいはずであり、それは羞恥心なのではないか、という反論である。確かに、「才能の不足」を暴露してしまうことは、何よりも恥かしいことであろう。ただし、こ

こで問題となるのは、李徴がそれをどのように感じていたかである。李徴は「才能の不足を暴露するかも知れないとの卑怯な危惧」と語っている。李徴は「才能の不足」が周囲に知られることを「危惧」、すなわち「あやぶみおそれ」ていた。「才能の不足」を周囲に知られ、その結果、辱めを受けることを、彼は、恥かしいことではなく、恐ろしいことと感じていたのである。

次に、彼の行動の中で羞恥心の可能性を感じさせるもう一つの箇所を検討してみよう。それは「人間であった時、己は努めて人との交わりを避けた。人々は己を倨傲だ、尊大だといった。実は、それが殆ど羞恥心に近いものであることを、人々は知らなかつた。」の部分である。李徴が人と交わらず、他人には尊大としか見えない態度をとり続けたのは、彼らを「瓦」であると軽蔑した結果であった。ただし、「才能の不足」の予感を隠すための虚勢が、人との交わりを避けさせ、ことさら尊大に見せたという事実も、そこには存在していたであろう。確かにこれは、羞恥心に近いものである。ただし、強烈な自尊心ゆえに自分の弱みを見せられないという心理は、一般的な「羞恥心」とは微妙に違う。「広辞苑」(第五版)は「羞恥」を「恥かしく思う気持ち。はじらいの感覚。」と説明している。李徴がこの心理を「殆ど羞恥心に近いもの」と表現しているのも、それが羞恥心と微妙にずれることを自分自身で認識していたからに他ならない。

ここまでの検討を確認してみよう。彼の言葉とは裏腹に、李徴の中に存在を確認できるのは、わずかに「羞恥心に近いもの」だけであり、「尊大な羞恥心」と呼べるような実態はどこにも見出せないのである。それでは、李徴のいう「尊大な羞恥心」とは、一体何だったのか。

これを考えるために、李徴の心を確認しておきたい。李徴は、自己の才能を強烈に自負していた反面、「才能の不足」を密かに怖れていた。この恐れについても少し考えてみよう。この怖れは密かなものであったが、恐怖といえるほどに強大であった。自分の才能を謙虚に予感することは、多くの場合、希望となるだろう。しかし、強烈な自負をもった李徴にとって、「才能の不足」した自己は絶対にあつてはならぬものであり、「才能の不足」を予感することは恐怖以外の何ものでもなかったのである。われわれは、次の言葉の重みを感じなくてはいけない。「己よりも遥かに乏しい才能でありながら、それを専一に磨いたがために、堂々たる詩家となつた者が幾らでもいるのだ。」さりげなく語られているが、彼の恐怖と嫉妬とがここには凝縮されている。自分よりも「遥かに乏しい才能」として軽蔑していた者が、彼の確信を裏切つて、次々と「堂々たる詩家」となつていった。しかも、それは「幾らでもいる」のである。そのような話を耳にした時の李徴の心中は、いかばかりのものであつたらう。その時の彼の顔、彼の姿、彼の声は、醜く歪み、ま

さに獣のようであつたに違いない。そして、そのような者が次々に出るにつれ、才能の不足を予感する恐怖はいやおうなく強まつていく。その恐怖と焦燥感、彼を押し潰すほど巨大なものとなつていったに違いない。

それでは問題を戻そう。「尊大な羞恥心」の実態は何か。われわれは、「尊大な羞恥心」の実態を消去法によつて特定できるところまで、李徴の内面を十分に検討してきている。李徴の中にあつた心を順に検討していこう。まず、強烈な反面、脆弱さを隠しもつていた彼の自尊心はどうだろうか。李徴は、これに「臆病な自尊心」という言葉を与えた上で、「尊大な羞恥心」と並列させている。従つて、これが「尊大な羞恥心」の実態であるとは考えられない。それでは、己の「懼れ」「危惧」を隠すための虚勢はどうか。確かにこれは羞恥心に近いが、李徴はこれに「殆ど羞恥心に近いもの」という表現を与え、羞恥心とは明確に区別している。さらに、李徴を引き裂いた「尊大な羞恥心」の実態と考えるには、これは、あまりに弱い心である。彼の自尊心と並立できるほどの強さを持ち、李徴を引き裂いた心という条件を満たせるものは、「才能の不足」を予感する恐怖、そして、そこから生まれる焦燥以外にはないのである。そして、何より、この強烈な心に対して、李徴はそれにびつたりする名を与えていない。李徴は「羞恥心」の語を、慣用的用法から大きくずらして使用し、「才能の不足」が露見することへの恐怖を「尊

大な羞恥心」と表現したのである。

われわれは、ようやく「尊大な羞恥心」の実態を特定することができた。李徴が恐怖に対して「特殊な」名を与えた理由については六節で考察するので、ここでは、この表現にかかわる別な問題を提起したい。先ほども述べたように、「才能の不足」を予感する恐怖心（李徴のいう「尊大な羞恥心」）は、強烈な自負を前提として生まれる心、いわば自尊心から派生した心である。だとすると、「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心」という表現は、彼の心の実態から大きくずれることになる。この表現は、自尊心と恐怖心とを対等なものとして捉えているからである。たとえば「臆病な自尊心ゆえの尊大な羞恥心」「臆病な自尊心の作り出した尊大な羞恥心」とでも表現した方が、彼の心の実態には、はるかに近づくはずである。確かに、彼にとって、己の限界が露見することは巨大な恐怖であり、それは、彼の自信や自尊心を覆い隠すほどの大きさを保持していたに違いない。その巨大さゆえに、彼には、その恐怖が、自尊心から独立した、自尊心と対等な心と感じられたのであろう。このように考えれば、「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心」は、彼にとつての恐怖の大きさを端的に伝えてくれる表現であったとも言える。ただし、従属関係にあるはずの「臆病な自尊心」、「尊大な羞恥心」を並列させたことには、これだけに留まらないもう一つの理由がある。この理由を、第三の謎としよう。

四 撞着語法が作り出す錯覚

ここまでの三つの謎がいずれも、対比・対照とかかわるものであることに気付いた読者もおられるかもしれない。李徴の告白を読み解くキーワードは対比である。李徴の告白の中には多彩な対比が散りばめられており、これが告白の修辞上の演出を支えている。五つの謎はまだ出揃っていないが、ここまでの三つの謎について修辞学の観点から答えを出し、その後、残りの二つの謎を提示したい。まず、第二の謎から考えてみよう。第二の謎とは、「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心」が感じさせる「内実以上の何か」の正体であった。結論を先に言えば、その正体は、撞着語法（Oxymoron）と呼ばれる修辞技法が作り出す、錯覚上の含蓄である。撞着語法の説明から始めよう。

撞着語法（Oxymoron）とは、「公然の秘密」「無冠の帝王」「慇懃無礼」「ありがた迷惑」のように、反対の意味の言葉をつなぎ合わせるることによって作られる表現である。（Oxymoronの訳語としては、撞着語法のほかに、対語結合、矛盾語法などもあるが、本稿では撞着語法を使用したい。」「臆病」と「自尊心」、「尊大」と「羞恥心」とはそれぞれ反対の意味の語であるから、「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心」は二つの撞着語法を並列させた表現である。撞着語法は反対の概念をつなぎ合わせるものであるから、そこには矛盾が生じ、

無意味な表現が生まれてしまいそうであるが、この組み合わせが無意味とはならず、ある種の新しい意味を感じさせることがある。そして、そのようにして作られた表現の多くは、含蓄を感じさせる思わせぶりな魅力を持つ。「公然の秘密」や「近くて遠い国」のような慣用句化した表現にはこの魅力はあまり感じられないが、慣用句化していない新しい組み合わせには、この魅力を感じさせるものが多い。たとえば、「醜悪な美貌」「冷酷な優しさ」「冷たい炎」「暗黒の輝き」などにはその魅力が感じられるだろう。これらの表現は、その意味するところをある程度伝えてくるものの、決して明確な輪郭は示さない。しかも、その矛盾する組合せは逆説的な新しい意味を感じさせるため、受け取る側はその意味するところをさまざまに膨らませて予感し、ある種の含蓄を感じてしまう。ただし、その含蓄に値するだけの内実を撞着語法は備えているわけではない。思わせぶりの魅力ある表現をオートマチックに作り出せる、これが撞着語法の大きな特徴なのである。興味深いことに、伝統的な修辭学においては、撞着語法は逆説と同じ原理から生ずるものと説明されてきた。香西秀信氏が主張しているように、逆説と撞着語法とは別な原理から説明されるべきものであるが、撞着語法と逆説とが、同じ原理から生まれた二種の表現、時には、同意語として使われてきたのは、撞着語法の作り出す含蓄、そして鮮やかな印象が、逆説を思い起こさせるためである。

それでは、撞着語法はなぜ、内実をとまわらない含蓄を感じさせるのか。実は、撞着語法が不思議な含蓄を作り出すことを明示した修辭学書を、筆者はまだ見つけてはおらず、当然、その理由についての説明も見たことはない。ただし、撞着語法の表現効果の背景には、われわれの認識の基本的な型が想定されている。佐藤信夫氏は言う⁽⁶⁾。

あらゆる語は四方八方に關係を放出している。人は、交錯するそれらの親近關係や對抗關係の網のなかで、ばあいに応じた感心の方向に沿って語の意味を了解する。そういう多方向の關係のうちで、もつとも理解しやすい、たぶんいちばん基本的な路線が對義關係なのだ。(中略)ところが(對義結合)の文においては、その理解しやすい道筋がたがいに衝突し合って、いわば一種の行きどまりになっているのだから、常識的理解力はそこで途方にくれる。それでは、われわれを「途方にくれ」されるはずの撞着語法が容易に理解できるだけでなく、そこに思わせぶりの含蓄を感じるのにはなぜか。今度は、瀬戸賢一氏の説明を引用してみよう⁽⁷⁾。

「かわいさあまって憎さ百倍」は、この間の事情をよく説明する。表面化した強烈な「憎さ」は、潜在的な過剰な「かわいさ」と對義的に結びついている。「かわいさ」は、高じることによつ

て極点を突き破り、「憎さ」に急転する。逆に、憎い相手に過度の親切を施す。天才と狂気は紙一重。両極の先端は、つねに反転する可能性に打ち震えているといえよう。

二人の説明をつなげれば、次のようになるだろう。われわれが語の意味を理解する場合の最も中心的な軸は対義関係であり、その軸は、単に理解の助けになるにとどまらず、その語と対義関係にある語を「潜在的」に感じさせている。撞着語法は、この潜在的な関係を刺激することで、単なる新しい意味を越えた不思議な含蓄を感じさせるのである。この説明が撞着語法の霧を全て晴らしてくれるわけではないが、筆者にも、現段階では、これ以上の説明を用意することはできない。多少の欲求不満は残るものの、ここでは、第二の謎として示した「臆病な自尊心」「尊大な羞恥心」の含蓄の正体が、撞着語法の作り出す錯覚上の含蓄であることを確認しておきたい。次節では第一の謎と第三の謎を考えてみよう。

五 対照法のタブー

第一の謎は、虎に変身した原因として、虎と正反対の羞恥心が挙げられている理由、第三の謎は、本来従属関係にあるはずの「臆病な自尊心」と「尊大な羞恥心」とが、対等の関係に置かれた理由であった。この二つの謎も、先ほどの撞着語法と同様、対比と連動し

ている。

李徴の告白にはいくつもの対照法(antithesis)が見られる。対照法という技法は、この語から最も普通に思い浮かぶ技法であるが、念のために「レトリック辞典」の定義を引用しておこう。⁽⁸⁾「語ないしは観念を対比||対称関係におき、両項を際立たせ引き立てる文彩」。対照法は、簡単に印象的な表現を作り出すことのできる技法であり、それだけに、この技法の用法にはある種のタブーがある。同じ「レトリック辞典」から、対照法の特徴とそのタブーについての説明を、少々長くなるが、引用してみよう。⁽⁹⁾

とにかく、この文彩は印象的で、説得力に富む。諺や格言、警句、名言、標語にその例が多いのもうなずける。例をあげれば、「聞いて極楽見て地獄」「話上手は聞き上手」「芸術は長く、人生は短い」(中略)

思うに、この文彩は恐らくもつとも手軽でもつともさまになる技法だ。フォンタニエが次のように注意しているのもけだし当然か。「これはもつとも華々しい文彩の一つだ。だが、まさしくその輝きの故に、真面目な主題においては慎重の上にも慎重を期して使用されることが望ましい。」語や観念に対比対称関係を設定するためとかく無理をし、不自然な印象を文に与えてしまうのだ。効果を狙うあまり作爲が目立ってしまうわけだ。

この説明を頭に入れた上で、告白の前半部を見ていただきたい。傍線部(イ)(ウ)(エ)は、形式的にも対句に近い完全な対照法である。さらに、対句のような完全な対の形を持っていないとも、表現内容が対比をなしていれば、その表現は対照法に含まれるので、傍線部(ア)(オ)も対照法となる。李徴の自己分析の中心部分は、そのほとんどが対照法なのである。対照法は「手軽でもっともさまになる技法」であるため、修辭学では、フォンタニエが述べているように、その乱用が厳しく戒められている。「まさしくその輝きの故に、真面目な主題においては慎重の上にも慎重を期して使用されることが望ましい。」という助言は、まるで李徴のために書かれたかのようにある。対照法はその「輝き」と手軽さゆえに、内容を歪めてでも対照法を実行しようという誘惑を起させるが、その誘惑に屈してはならないという警告である。しかし、李徴は、まさにその誘惑にとらえられ、告白では濫用と言えるほどに対照法を多用させている。そして、これはそのまま、第一、第三の謎の答えとなる。「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心」という見事な対照法を成立させるためには、「自尊心」と対をなす「羞恥心」、そして両者の対等な関係が必要だったからである。李徴は対照法の罫にとらえられ、自己分析を歪めてしまったのである。そして、李徴は対照法だけでなく、撞着語法においても同様の罫にはまっている。この罫を考えるために、次節では自尊心の隠蔽という事実を確認しておきたい。

六 自尊心の隠蔽

李徴の告白では、修辭的演出の過剰な追求とともに、自尊心の隠蔽を見落とすわけにはいかないが、これは、既に論じたことがある問題なので、ここではポイントのみを提示しておきたい。

李徴の告白は非常に屈折した「文体」で作られており、数箇所の言葉の言い換えがある。最初に引用した本文中の波線を伏した箇所で言い換えが行われている。言い換えのポイントを箇条書きで示してみよう。

(a) .. 倨傲・尊大 ↓ 羞恥心に近いもの

(b) .. 自尊心 ↓ 臆病な自尊心

(c) (d) .. 臆病な自尊心 ↓ 尊大な羞恥心

(c)(d)の言い換えは明示的ではないため分かりにくいが一文を挟んで「臆病な自尊心」が「尊大な羞恥心」に言い換えられていることを確認していただきたい。そして、これらの言い換えは全て、次の方向で行われている。

自尊心 ↓ 羞恥心

特に(d)は、虎に変身した原因を総括した箇所である。この総括において、自尊心は完全に抜け落ちてしまうのである。

執拗に自尊心を羞恥心に言い換えることで、李徴は、強烈な自尊心を小さく見せようとした。李徴の欠点は、強烈な自尊心に集約できるから、自尊心を小さく見せることは、自己の欠点の隠蔽に他ならない。そして、そのための、いわば自尊心の目隠しとして選ばれたのが羞恥心であった。羞恥心は二つの点で、この役割に最適だからである。その一つは、恐怖心と羞恥心には類似した部分のあること。もう一つは、自尊心と羞恥心とが意味的に対照的な位置にあるために、自尊心を小さく見せる上で羞恥心が効果的なことである。

そして、「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心」という表現は、自尊心の隠蔽という点においても有効である。「臆病」が「自尊心」を小さく見せ、「尊大」が「羞恥心」を大きく見せる結果、羞恥心の比重を大きくできるからである。李徴は、自分の中には存在しない「尊大な羞恥心」という、いわば幻を引き合いに出すことで、強烈な自尊心に支配されていた事実を巧妙に隠したのである。ただし、李徴がこの撞着語法にこだわった最大の理由は、その圧倒的な表現効果に求めるべきであろう。次節は、ラテン文学での撞着語法の歴史を参照しながら、その圧倒的な表現効果を考えてみたい。

七 撞着語法の力

「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心」という二つの撞着語法は、そのまま告白の主題をなしている。彼の告白はこの表現に収斂される

と言っている。実は、撞着語法が作品の中心的主題を形成するという現象は、李徴の告白に特有なものではない。フランス文学者月村辰雄氏は、フランスの恋愛文学において、撞着語法が「中世から十七世紀にいたる恋愛表現のすみずみに浸透」し、そこに表現された複雑な恋愛感情が、そのまま作品の主要なモチーフを形成していった事実を指摘している。古代ローマにおいて、討論の場で論敵を鋭く攻撃するための技法として洗練されていた撞着語法が、後に、恋愛という、これ以上ないほどふさわしい対象に出会い、やがて恋愛の姿と一体化していくのである。月村氏は、紀元前一世紀に活躍した詩人カトウルスが、恋愛表現に最初に撞着語法を導入した時の驚きと感動を次のように語っている。¹²⁾

カトウルスも漸層法を駆使した恋愛詩人であった。(中略)しかし、ここで奇妙であるのは、彼の詩集の中にただひとつ未完成のまま残された断片のような二行詩が差し込まれていることであろう。

私は愛して憎んでいる。どうしてそんなと、お前は疑うのだろうか、
わけのわからぬながら私はそう思い、それで苦しんでいるのだ。

(中略)「愛して憎む」——西欧文学史上、はじめて書き記された表現であった。(中略)彼はただただ自分の発見にうちふるえるは

かりで、オクシモロンの先を続けることができず、新しい恋の絶頂を二行詩のままにとどめざるをえない。

恋愛表現に最初に撞着語法を使用したカトウルスは、そのあまりの力に圧倒され、その詩を完成させることができなかった。もちろん、李徴とカトウルスとを比較することはできないが、このエピソードは、撞着語法の圧倒的な表現効果を端的に伝えてくれる。「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心」という表現を見出した李徴も、少なからぬ衝撃を受け、その魅力にからめとられてしまったに違いない。この衝撃が李徴の内省を狂わせ、この表現を破壊するような自己分析に立ち入らせなくしてしまったのである。もちろん、この衝撃が彼の自己分析を浅いままにとどめたのか、それとも、不十分な自己分析が撞着語法を可能にさせたのか、その因果関係の順序を確定することはできない。そして、因果関係の順序が確定できないことは、不十分な自己分析と対照法の濫用においても同様である。ただし、告白から読み取れる李徴の姿を明らかにしようとするわれわれにとつて、これらの順序はさほど重要ではない。重要なことは、告白の中で、撞着語法・対照法と不十分な自己分析とが、お互いを前提とし合いながら見事にバランスを保っていること、そして、このバランスが、告白の深遠かつ含蓄のある雰囲気を作り出しているという事実である。

李徴の告白は、修辭的演出と自尊心の隠蔽という、二つの点に執拗にこだわったものである。そして、「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心」という表現は、これ以上ないほどの鮮やかさで、この二つを実行することができる。彼の告白は、まさにこの表現に要約されるのである。

八 第四の謎と李徴の悲劇

第四の謎に入ろう。それは、李徴の口述する詩を聞いた袁慘の次のような感想である。

長短凡そ三十篇、格調高雅、意趣卓逸、一読して作者の才の非凡を思わせるものばかりである。しかし、袁慘は感嘆しながらも漠然と次のように感じていた。成程、作者の素質が第一流に属するものであることは疑いない。しかし、このままでは、第一流の作品となるのには、何処か（非常に微妙な点に於て）欠けるところがあるのではないかと。

非常に思わせぶりの感想である。袁慘の感じた「欠けるところ」とはどのようなものなのか。これが第四の謎である。この謎に「飢えに苦しむ妻子を顧みない冷たさがあったから。」のような「教育的な」解答で満足する読者はおるまい。人格と芸術作品とが別もので

あることはわれわれの常識であり、人格円満な天才詩人など、誰も期待してはいないからである。「山月記」の中で李徴の詩は紹介されていなが、第四の謎を考える手がかりはある。李徴は告白という最大の「作品」をわれわれに残しているからである。彼の告白の中に、詩人の欠点としても一般化できる形で何らかの「欠けるところ」を見出せばいい。そして、われわれはその答えを既に見出している。

李徴の告白に残されているのは、修辭的演出への執拗なこだわりの跡であり、自己の欠点を隠蔽するための隠微な仕掛けであった。そして、彼の修辭的演出へのこだわりは十分に成功しているといつていい。自分の「真実」を何も語っていないにもかかわらず、これだけ多くの読者を惹きつけ続けてきたことが、何よりの成功の証であろう。李徴は、修辭的才能においては間違いなく第一流である。しかし、その一方で、彼の不十分な自己分析は、彼にものごとの本質を掴み取る力が欠落していたことを伝える。もちろん、李徴自身は自らの真の姿を理解していたが、告白ではあえてそれを語らなかつたのだ、という反論も考えられよう。しかし、たとえ、自分を飾ろうとする強烈な意識があつたとしても、自分の真の姿を李徴が掴めていれば、告白がここまで内実のないものとはならなかつたはずである。李徴は、これほど過酷な運命に置かれているにもかかわらず、その告白からは、それにふさわしいだけの、執念や気迫、ある

いは発見や悟りといったものが伝わってこない。告白から強く伝わってくるのは、どこか他人事のような自嘲的な調子である。ものごとに向かう姿勢の根本において、彼には決定的に重要な何か欠けているのである。これは、詩人にとって致命的な欠点となろう。もしも、袁愴が、李徴の詩に本質を鋭く掴み取る力を感じていたとすれば、その感想は「格調高雅、意趣卓逸」とは異なるものとなつたに違いない。「格調高雅、意趣卓逸」は、まさに、撞着語法や対照法に代表される、修辭的演出によって作り出せる印象だからである。

李徴は、「才能の不足」を暴露してしまふことを恐れ続けていた。実に皮肉なことに、自分を粉飾しようとした告白において、彼は詩人としての大成を阻む致命的な「不足」を暴露してしまふのである。彼は、自分が大成しなかつたのは、努力を惜しみ、詩友と切磋琢磨しなかつたからだという。しかし、李徴は努力では補いきれない、人間としての根本的な部分で致命的な欠点を持っていた。彼が密かに予感した恐れは、的中していたのである。詩作のために虎に成り果てた李徴にとつて、あまりに残酷な運命ではないか。

そして、李徴の告白には、彼のもう一つの悲劇が描かれている。李徴は、人間としての言葉を語れる最後の瞬間において、修辭的演出と自尊心の隠蔽とに異様なほど執着した告白を披露する。李徴は、なぜこれほど自分を飾ろうとしたのか。他でもない、彼が自尊心に支配されていたためである。彼は巨大な自尊心のために虎に成

り果てた。その彼が、最後の告白においても、己の告白を飾り、自尊心を隠蔽しようとする。李徴は、人間としての最後の瞬間においてまで、少しも自尊心から解放されてはいない。おそらく、李徴が自尊心から解放されることは永久にあるまい。李徴の苦しみは永遠に続くのである。

『山月記』に描かれているのは「近代人の苦惱」などではない。どこまでも果てしなく続く暗黒の闇なのだ。中島敦は、レトリックを道具として完璧に使いこなすことで、最小限の言葉の中に、この救いのない恐ろしいテーマを描ききつたのである。

九 第五の謎

李徴の変身した動物はなぜ虎なのか。これが最後の謎である。「人虎伝」の存在を知っているわれわれにとつて、この問いはあまりに素朴、あるいは幼稚と思えるかもしれない。しかし、虎は、動物の中で最強の百獣の王であり、われわれがイメージする限りでは、最も自由で堂々とした野獣である。李徴の変身を徹底的に悲劇にしたのであれば、「人虎伝」にこだわることなく、もつと惨めな動物に変身させてしまえばいいのである。人に酷使される家畜、捕食者に怯える小動物、惨めな動物はいくらでもいる。「人虎伝」を翻案した悲劇は、その前提において、徹底さを欠いた悲劇となる運命にある。それを承知の上で、中島敦が「虎に変身する男の悲劇」を作

つたのはどうしてであろうか。

この理由を、『山月記』の本文だけから確定することは不可能である。ただし、われわれが行ってきた分析は、この理由を考えるための有力な手がかりを提供してくれる。「山月記」のテキストの分析から明らかになったのは、修辭的才能は第一流でありながら、ものごとの本質に迫りきれず、詩人として大成できない李徴の姿であった。この姿は、作者である中島敦自身と少なからず重なるのである。中島敦の作品はどれも見事なでき栄えであり、特に文体・修辭・構成といった点は十分過ぎる程に洗練されている。が、その一方で、彼の明快過ぎる、文体・構成・主題は、作品にどうしてもテーマ小説という浅い印象を与えてしまう。(『山月記』は彼の作品の中で例外的に難解な作品である。)李徴の自嘲は、中島敦の自分自身への自嘲だったのではないか。しかし、彼は自分を自嘲しながらも、やはり自己の文学的才能には期するものがあつた。その複雑な思いが、悲劇に徹しきれない悲劇を、彼に作らせたのではないか。文学的才能は第一流でありながら、第一流の作家となれない悲劇。『山月記』は中島敦自身の寓話として読めるのである。

『山月記』は中島敦の作品中で、際立った異彩を放ち続けている。作品に投影されてしまった作者の苦惱、その濃厚な迫力が、この短い作品に、これほどの魅力を与えているのではないだろうか。

注

- (1) 香西 秀信「修辭的思考」、明治図書、一九九八年、一三七―一三八頁
- (2) 本文は新潮文庫「李陵・山月記」、一九七九（一九六九）年によった。
- (3) 「羞恥心」と同様、「臆病」も虎のイメージとの間に連続性はない。自らが虎に変身した原因の中で「臆病」を使用した理由についても本稿の中で明らかにするが、謎を簡潔にするため、ここでは「臆病な」の使用を第一の謎には含めずにおく。
- (4) 野沼 正美「山月記」論―自己劇化としての語り―（『国語国文研究』八七号、一九九〇年）
- (5) 香西前掲書、七七一―〇二頁
- (6) 佐藤 信夫「レトリック認識」、講談社学術文庫、一九九二年、一六九頁
- (7) 瀬戸 賢一「認識のレトリック」、海鳴社、一九九七年、六二頁
- (8) 野内 良三「レトリック辞典」、国書刊行会、一七二頁
- (9) 野内前掲書、一七三頁
- (10) 柳沢 浩哉、森田 真吾「山月記」の修辭的分析―「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心」の修辭とその狙い―（『人文科教育研究』27号）二〇〇〇年。なお、本論文には、「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心」に使われた擬人法が、「自尊心」「羞恥心」に対して、制御できず勝手に動き回るという印象を効果的に与えていることが指摘されている。
- (11) 月村 辰雄「恋の文学誌―フランス文学の原風景をもとめて」、筑摩書房、一九九二年、一九五頁
- (12) 月村前掲書、一九一―一九四頁

謝辞

本稿の構想段階において、本学大学院生、中重芳美氏より複数の有益なアドバイスをいただいた。特に、第五の謎の問題提起は中重氏が発見したもので

あり、中重氏了承を得て本稿に組み入れることができた。中重氏に心より感謝申し上げる。

また、本稿の査読にあられた先生には、二回にわたり、大変丁寧かつ有益な助言をいただいた。助言の全てに沿うことはできなかったが、特に、第三の謎の部分は助言をいただくことで大幅に改めることができた。忍耐強い査読をいただいた査読委員の先生に心より感謝申し上げます。

―やなぎさわ・ひろや、本学教育学研究科助教―